

## 一歳六ヵ月から小学三年生までを対象に漢字教育を実施

「石井式漢字教育」の普及を目指して設立された「石井式国語教育研究会」では、「石井式能力開発教室」や、通信指導システムの「母子の漢字教室」を主宰しています。

また、漢字教育を導入している保育園や幼稚園は全国で七百近くを数えるまでになり、これからますます増えることが予想されます。

このことは、園児が喜んで漢字に親しみ、本を読むことが好きになり、ひいては小学校に入学しても、授業に意欲的に臨む傾向にあることが話題を集めるようになってきていることから理解できます。

幼稚園といえば、石井式漢字教育の課外教室(石井式国語教育研究会主宰)のために、園児が帰宅したあとの教室などを提供するケースも増えています。これは当初、子供が卒園したあと、小学校の授業内容にこのような教育システムがないことから、漢字学習を続行したいと希望する卒園生たちの親の声に応える形で実現したものです。

「石井式能力開発教室」は一歳六ヵ月から小学三年生までを対象に、漢字を通して、子供の国語力の基礎を育てることを目的とした教室です。そこで、「石井式国語教育研究会」の教務主事の責任者であ

る阿賀野栄子先生に、教室の様子を報告していただきます。

## 漢字を楽しく学ぶことで読書が大好きな子に

石井式国語教育研究会教務主事 阿賀野栄子先生

小学校入学の前後一年ぐらいの間に「石井式能力開発教室」のことを知り、「ぜひ、子供を通わせたいと思うのですが、もう遅いでしょうか」と相談にお見えになる親御さんが少なくありません。それは、すでに幼少のころからこの教室に通っている子供たちの様子を見て興味をもたれたからです。たとえば、幼稚園児が漢字かな交じりの絵本を弟妹に表現豊かに読み聞かせているほのぼのとした姿、新聞を読んでいる一年生、学校での学習に意欲的に取り組む態度など、それらが、幼児期からの漢字教育のたまものであるという話を聞いて問い合わせられてくるのです。

一般的にはまだまだ、幼児期における漢字教育の大切さは十分に浸透していませんから、そのことをわかりやすく説明しますと、「就学前にひらがなと数字だけはしっかり教えておこうと思ったけれど、漢字までは考えが及ばなかったし、子供にはひらがなより漢字のほうが

やさしいということは、それこそ晴天の霹靂<sup>へきれき</sup>でした」と言って驚かれます。

そこで、当教室では大脳生理学の見地から、丸暗記能力の高い幼児期と、論理的思考能力が育ってくる小学生、それぞれに合わせた指導をしているので、いまからでも十分に間に合うことを伝えると、皆さん、ほっとした顔をなさります。

右脳には漢字を“絵(図形)”を見るのと同じように理解する働きがあるので、その能力が著しい幼少期には苦もなく、漢字を記憶できることを実感してもらいます。漢字をぶ“図形”ととらえれば、ひらがなよりも形が複雑なだけに、覚える手がかりが多く、子供にとって記憶の定着が早いのです。

さらに、ひらがなは音を表す表音文字で、一字一字には何の意味もありません。ところが漢字は、音と意味を表す表語文字なので、一字一字が具体的な意味内容をもっていますから、その意味でも子供は、漢字のほうがひらがなより興味がもてて覚えやすいといえます。

石井式の漢字教育では“目”と“耳”を同時に働かせながら、まず漢字の読み方から学びます。そして、自然に頭の中にその字の形が浮かんでくるようになってから、字を書かせるようにします。つまり、読み

書き分離教育で、読み先習を特色とするものです。漢字の学習では、フラッシュカードやゲーム、読みドリルなどを通し、くり返し読むことで、言葉として定着させていきます。

たとえば、フラッシュカードは、先生が漢字を書いたカードを何枚か重ねて持ち、フラッシュが光るように一瞬だけカードを見せながら、次々に読ませていくものです。子供にしてみれば、カードがめくられるスピードに合わせて瞬時のうちに、そして連続的に読みあげていかなければなりませんから、神経を集中させ、熱中して取り組むことになります。これは、短時間での反復回数が多く、潜在意識にそれぞれの漢字のイメージが定着しやすいうえに、集中力を高めるのにも効果があります。

「四字熟語」の学習も、“四字熟語のカルタ取り”などゲーム感覚を取り入れた方法を活用することで、楽しみながら、自然に覚えることができます。

また、漢字というのは、論理的、体系的にできた文字ですから、子供の考える力を引き出すすばらしい力をもっています。その点に着目し、漢字の成り立ちを説明しながら、子供とともに考えていく解字指導は、当教室の小学生クラスでも重要な指導の一つで、漢字に対す

る興味をより一層深め、漢字が好きになるのに役立ちます。

教室では単に知識として成り立ちを“教え込む”といった指導法は避け、あくまでも漢字の面白い世界に案内するようにしています。

たとえば「名という字の成り立ちは“夕”と“口”を合わせてできたものです」と簡単に説明するだけでなく、次のように取り組みます。

「名前の“名”は“夕”という字と、あとは何の字でできていますか？」「そう、“口”よね。では、どうして、この二つを組み合わせたのでしょうかね」。まずは子供に考えさせます。そして意見を発表させたあと、次のような話を楽しくしてあげます。

昔は、夕方になると電気もないのもう真っ暗でした。そんなとき、向こうからだれかがやって来る。だれだろうとよく見ても、暗いからわからない。だから、こちら側で「おら、田吾作だ」と口を使って言うと、向こう側で「おらあ、権兵衛だ」と名前を言う習慣がありました。つまり、「名」という漢字は“夕”方に“口”で声を出して名前を呼び合うという意味から、“夕”と“口”が組み合わさって名という字になりました という具合です。子供たちは楽しくお話を聞きながら、イメージをふくらませていきます。

二年生のクラスでこんなことがありました。

教室で、二年生が読本として芥川龍之介の『杜子春』を読んでいた時のことです。貧乏だった杜子春が、不思議な老人のお陰で大金持ちになるというくだりで、『するとこういう噂を聞いて、いままでは路で行き会っても、挨拶さえしなかった友達などが、朝夕遊びにやって来ました』という一節があります。ここを読んだ子供たちの中から、「先生、杜子春のお友達は、本当に薄情だと思います。だって道で会ったのなら、広いから気がつかないこともあると思いますが、路で会ったのなら狭いのに気づかないはずがないから、貧乏なときは挨拶さえしなかったというのは、本当にひどいと思います」という声があがりました。

いまでは明確に意識されない「道」と「路」の字ですが、本来は「道」の字は、中心となる大きな道を表した字、「路」は、足を使って道と道をつなぐ狭い路の意味があります。解字指導でそんな話を日ごろ聞いている子供たちが、すばらしい読み取りをしてくれたのです。

解字により培われた漢字に対する感性が、読解にまで及び、深い読み取りが行われたのです。

このように漢字の成り立ちを学習していくと、今度は初めての漢字

でも、自分なりに分析したり推理を働かせたりして、その意味や読み方を考える能力もついてきます。

漢字が苦もなく読めるようになると、読書の幅が広がり高度な漢字かな交じり文も喜んで読み、覚えた漢字も生きた言葉として理解し、深い認識へとつながっていきます。そして、すぐれた文章をたくさん読むことによって、自然に文章力がつき、話す力や聞く力も育ってきます。

幼少期は音読をととても喜びます。そして、この音読が黙読の基礎をつくるのです。

こうして読書の楽しさを音読により目と耳で体感した子供は、例外なく本を読むのが大好きになります。

音読ということでは、もう一つの柱として、論語、歌謡、和歌、俳諧、物語、随筆、紀行、漢詩、朗詠など、幅広い分野の古典を教材にしています。

もちろん、古典の教材もすべて、漢字かな交じりで表記しているので、漢字の意味を糸目にして、全体のイメージをとらえることもある程度は可能です。『小倉百人一首』に、「ももしきや ふるきのきばの しのぶにも なおあまりある むかしなりけり」とありますが、「百敷や古き

軒端のしのぶにも猶あまりある昔なりけり」と漢字かな交じりで表記することで、少なくとも、「ももしき」を下着の“<sup>もも</sup>股引き”と早とちりして、全体像を台無しにするようなことは起こらずに済みます。

幼少期の子供は、漢字に対して興味さえもてば吸い取り紙のように吸収しますし、同じことをくり返すのが好きなので、言葉として定着させることも決して難しくはありません。

ただ、大切なことは、くれぐれも教え込むのではなく、漢字カードやかかるた、楽しい解字指導などを通して遊び感覚で興味や関心を引くように導いてあげることです。その結果「漢字」を学ぶことに夢中になり、自然に理解力や集中力、洞察力や創造力も育っていきます。それは、学校の授業でも遺憾なく発揮され、あらゆる学科で学力を高めることになります。

ですから、石井式でも「漢字を教える」のではなく、「漢字で教える」のであり、漢字はあくまで手段であると位置づけられています。

ともあれ、私自身、教室で子供たちが漢字を楽しく学ぶことで、漢字が好きになり、それにともなって、語彙が豊かになり、読書が大好きな子供に育っていくのを見ながら、子供の能力を高める漢字教育のすばらしさをあらためて実感する毎日です。